下顎骨骨折の統計的検索

——下顎関節突起骨折に対する臨床的考察——

島村 憲 優・永原 國 央・田辺俊一郎・樽 沼 修 二
 亀 谷 明 秀・磯 貝 昌 彦・兼松 宣 武・山 田 和 人*
 住友伸一郎*・玄 景 華*・高井 良 招*・内藤 亮 治*
 森 昌 彦*・宇野 克 美**

A clinical statistical study of mandible fracture

——Clinical conclusions about a fractures of the condyloid process——

Norimasa SHIMAMURA・Kuniteru NAGAHARA・Toshi-ichiro TANABE

Shuji KURENUMA・Akihide KAMEGAI・Masahiko ISOGAI

Nobutake KANEMATSU・Kazuto YAMADA*・Shinichiro SUMITOMO*

Hyun KYUNGHWA*・Yosiaki TAKAI*・Ryoji NAITO*

Masahiko MORI*・Katsumi UNO**

Key words: mandibular condylar fracture (顎関節突起骨折), clinical statistical study (臨床統計的観察)

緒 言

顎関節突起骨折に対する処置と予後の関係については従来より種々の報告がなされており、診断および処置計画が予後を大きく左右するといわれている。それには骨折部位、骨折片の様態、年齢、などが重要な診断基準とされている。今回、1986年1月より1990年12月までの5年間に当科を受診した顎関節突起骨折患者41名(45関節)について予後調査を行い、年齢、性差、骨折の部位ならびに骨折片の様態、処置方法と予後の障害度の関係について検討を加え若干の知見を得たので報告する。

対象および方法

1986年1月から1990年12月までの5年間に当科を受診した顎関節突起骨折患者41名を対象とし、臨床統計的観察は、診療録を用いて年齢・性別分布、原因別頻度受傷より来院までの期間、処置内容に関する分析検討を行った。骨折の種類、骨折片の部位と様態については、X線写真より読影し、久保ら¹⁾の分類に準じ評価をした。また治療成績に関しては、久保ら¹⁾に準じた調査用紙を送付し、回答の得られた29例(70.7%)について中富²⁾の分類に従って評価検討した。

結 果

1. 年齢・性別分布

年齢分布は2歳から75歳までで、その平均年齢は27.8歳であった。性別分布は、男性27例(65.9%)、女性14例(34.1%)で男性に優位であった。年齢別頻度をみると、10歳代および20歳代がともに11例(26.8%)で両方をあわせると22例(53.7%)と過半数を占めていた。

2. 原因別頻度

原因別では、交通外傷が22例(53.7%)と最も多く、次いでスポーツ外傷9例(22.0%)、転倒・転落7例(17.1%)、喧嘩・殴打2例(4.9%)、作業事故1例(2.3%)の順であった。

3. 受傷より来院までの期間

受傷より来院までの期間は、1週間以内のものが35例

朝日大学歯学部口腔外科学第2講座
(主任：兼松宣武教授)

* 朝日大学歯学部口腔外科学第1講座
(主任：森 昌彦教授)

** 市立島田市民病院歯科口腔外科
(主任：北島 正科長)

The Second Department of Oral Surgery, Asahi University School of Dentistry (Chief: Prof. Nobutake Kanematsu)

* The First Department of Oral Surgery, Asahi University School of Dentistry (Chief: Prof. Masahiko Mori)

** Department of Maxillofacial Surgery and Stomatology, Shimada Municipal Hospital (Chief: Dr. Tadashi Kitajima)

受付日：平成4年5月26日

図 1 受傷時の年齢と障害度

(85.4%)を占め、2週間以内のいわゆる新鮮骨折例は37例(90.2%)と大半を占めていた。

4. 骨折の種類

骨折の種類は、顎関節突起単独骨折症例はすべて片側性骨折で16例(39.0%)、他部位骨折併発症例は25例で、そのうちの4例が両側性顎関節突起骨折であった。

5. 処置内容

処置内容に関しては、顎関節突起部に対して非観血的処置を行ったもの29例(70.7%)、同じ観血的処置を行ったもの3例(7.3%)であった。非観血的処置を行ったものは、新鮮例であり、顎関節頭部・上顎部など高位での骨折の場合、骨片の偏位が少なく、疼痛や、開口障害などの症状が強くないものであった。また、下顎部・基底部など低位での骨折においては、亀裂骨折など偏位の少ない症例に対して施行されていた。非観血的処置の内容は、線副子による歯牙結紮を用いた上下顎間固定が62.1%、ついて経過観察のみ行ったもの27.6%であった。一方、顎関節突起骨折に対する観血的処置の内容は、キルシュナー鋼線による整復固定術2例と、骨片の除去1例であった。

治療成績について

治療成績は、対象患者全員に調査用紙を郵送し、その回答によって予後の判定を行った。用紙の回収率は41例中29例(70.7%)であった。なお、今回予後の判定には、中富²⁾の分類を用い、その結果は回答のあったもの29例のうち完全治癒15例(51.7%)、障害I 10例(34.5%)、障害II 4例(13.8%)、障害III 0例であった。

1. 受傷時の年齢と障害度との関係

受傷時の年齢と障害度との関係は、20歳未満の症例では83.3%が完全治癒という結果であった(図1)。

2. 骨折の部位・様態と障害度との関係

顎関節突起骨折の部位と骨折片の様態また予後成績における障害度との関係は、下顎部・基底部などの低位骨折のほうが、頭部・上顎部などの高位骨折にくらべ予後が良かった(表1)。

考 察

低位での骨折例が高位での骨折例に対して予後が比較

表 1 骨折の部位、様態と予後との関係

部位	頭部	上顎部	下顎部	基底部
様態	頭部	上顎部	下顎部	基底部
亀裂			(6)	(12)
偏位	(1)	(1)	(1)	(5)
転位		(1)	(2)	(1)
偏位脱臼	(4)	(2)	(2)	
転位脱臼	(1)	(3)	(1)	

完全治癒
障害 I
障害 II
障害 III
不明
()内は症例数

的良い結果を示したことは、低位での骨折の場合、顎関節を傷つけることなく整復を確実に行うことができること、さらに今回の調査では低位での骨折例に骨片の偏位が少なかったことが起因したと思われる。

また、顎関節突起骨折に観血的処置を行った症例に予後不良が多い傾向がみられた原因は、顎関節へ手術侵襲が加わって術後の障害が残ったことによるためと考えられる。以上のことより顎関節突起骨折の部位にかかわらず、骨折片の偏位がないもの、あるいは少ないものに対しては非観血的処置(上下顎間固定)後、開口訓練を行うのが最も良い結果を招くと考える。

結 語

今回、1986年1月より1990年12月までの5年間に当科を受診した顎関節突起骨折患者41名(45関節)について予後調査を行い、年齢、性差、骨折の部位ならびに骨折片の様態、処置方法と予後の障害度との関係について検討を加え若干の知見を得たので報告した。

本論文の要旨は第46回日本口腔外科学会総会(平成4年4月17日、名古屋)において発表した。

引 用 文 献

- 1) 久保四郎, 村橋 護, 他: 顎関節突起骨折124症例に関する臨床的検討, 特にその分類について. 日口外誌 29: 1794-1805 1983.
- 2) 中富憲次郎: 顎関節突起骨折の臨床的研究. 口科誌 13: 132-156 1964.